

加齢研ニュース

平成17年12月1日
 東北大学加齢医学研究所
 研究会同窓会発行

【所長室便り】

帯 刀 益 夫

「国立大学法人東北大学」となって2年目を迎え、この4月には、総務、人事、研究を担当する理事が交代し、それぞれの担当課題に運営に少しずつ変動があった。法人化後の運営で最も重要な運営費交付金については、各部局の「配置職員数」と「人件費総額」についての議論はなかなかまとまらないままで、結果として16年度は、大学全体として人件費総額で剰余金を残す形となった。全国の国立大学法人としてもかなりの剰余を残すこととなったが、これは、法人化になってからの運営についてどの大学でも思い切った方策は採ることができず、しばらくは様子を見ていた結果を反映しているのではないかと考えられる。東北大学では、17年度に限っては、16年度の剰余金を考慮に入れて効率化に対応することが可能となり、当面の大きな変更はなく解決が図られた。18年度以降の方式

については、新理事のもとでこれまでとは異なる方式で人件費が試算され、たとえば医系部局は医師調整手当が措置されなくなるなど大幅な変更を迫られる部局も生ずることとなり、加齢研としても大幅なマイナス要因が予想されたため、星陵地区部局がまとまって反対の意向を示すなどの対応もおこなった。これらの経緯を踏まえて財務戦略会議で議論を重ねた結果、最近になって最終的な結論に到った。それによれば、人件費は各部局の現状の平均単価をベースに算定することとし、部局毎に「配置職員数」の範囲内で、「人件費総額」の範囲内であれば、自由に運用することができるというものである。また、結果として剰余が生じた場合は、部局毎に次年度以降に繰り越して使用できる、という方式が決定した。なお、19年度以降については、部局の標準単価を設けて計算すること、また、「助手」が「助教」へ変更されることに伴う人件費の変動を加味することが必要であるが、これにより、18年度以降の中期計画年度中の人員配置

加齢研ニュース 第44号 目次

所長室便り (帯刀 益夫)	1
分野紹介 (医用細胞資源センター)	3
留学報告 (松永 英治)	4
研究会便り (井川俊太郎)	6
所内人事消息	8
研究会同窓会広報 (近藤 丘)	9
編集後記	10

についてある程度シミュレーションが可能となり、加齢研としても、やっと今後の計画を考えることができるようになった。さらに、これと呼応して、教員、その他職員の雇用、俸給、定年など、効率化による人件費削減や人事院勧告なども考慮に入れた東北大学独自の人事計画を建てる必要があり、人事担当理事を中心として策定中であり、今年度中におおかたの結論を得て、来年度からスタートさせようとしている。

これまでの大学の概算要求は法人化により大きく変わった。大学の制度設計など運営の自由度が大きくなる代わりに、基本的に運営費交付金の中でやりくりすることになり、各大学法人に渡しきりの運営費交付金以外には、特別研究教育経費として約700億円があるだけで、これが毎年の競争的資金として全国の国立大学法人、国立共同利用機関全ての概算要求に対応する経費となっている。すでに、16年度から各機関が4～5年の継続的な経費を獲得した結果、新規事業に対する毎年の予算は狭まってしまうことになり、先行きが心配である。こうした背景もあって、各部局からの要求は本部で絞られることになり、加齢研はヒト脳のイメージングなどとバイオインフォマティクス研究を統合し、学外、学外の機関と連携して研究を行うための脳研究のセンターを平成18年度の概算要求としたが、東北大学が文科省へ要求する学内順位内に到達しなかった。東北大学全体の要求結果も、ある程度少額の要求に止まり、他大学と比べると相対的によいものの、芳しい結果とはいえないものであった。このところ新規の設備の導入の予算が無く、また、一時期沢山導入された機器も老朽化しつつあり、大学として新たな設備の導入は喫緊の課題となっており、東北大学全体としては、全学的なマスタープランを立てて整備をしてゆく計画となっており、今後の加齢研の概算要求でもこれを考慮する必要がある。

法人化により、大学としての認証評価、中期計画の遂行についての大学評価など多様な評価に対応しなければならない。こうした評価が、結果として以後の運営費交付金などの査定資料となり、競争的環境での差別化が助長し、行政改革の一環として小さな政府への移行を目指すものであることは明らかであるが、だからといって大学はこれを受け身として対応するだけでなく、この評価をいかに positive なものとして対応してゆくかが重要になっている。東北大学としては、このような評価に対し、教員個人個人の教育、研究、管理運営をはじめとするさまざまな活動のデータをデータベース化し、これを元に個人の評価を行うとともに、部局評価、さらには大学全体の評価の資料としてまとめることとなり、この夏から加齢研でも各人のデータ入力が進められた。また評価項目なども標準化され、11月中旬までに部局評価の資料の提出を求められているところであり、現在研究推進委員会等で準備中である。この資料を元に、今後ヒアリングを行い、各部局の状況を把握し、評価を行なうとともに、必要に応じて改善策を提示するとしている。そして、部局へ配分されるべき運営費交付金や奨学寄付金などからのオーバーヘッド等を原資とする総長裁量経費の一部から、これら部局評価に対応した傾斜配分を行うことになる。既に、一部の経費については、本年度から各部局の教員の科学研究費申請比率や大学院博士課程の充足率などを考慮に入れた傾斜配分を始めており、今後こうした部局間の競争的環境も強まるものと思われる。なお、今年から総長裁量経費から若手研究者に対する研究資金も設けられ、今年度は部局長推薦枠で加齢研からの申請が採択されていることは大変喜ばしいことである。

法人化後の東北大学の総長の選考は、外部委員を含む経営協議会と研究教育評議会、役員会の委員から構成される総長選考会議が候補者の

最終決定を行うという他大学と比べると独自の方式をとることとなり、経営協議会と研究教育評議会がそれぞれ総長候補者を推薦することになっている。この方式では大学構成員の意向が十分に反映されないため、総長のリーダーシップとこれを支える大学構成員の間で運営がスムーズに行かないことも考えられる。これについては研究教育評議会でも再三議論となったところであるが、結局、研究教育評議会内に作業部会を設け、審議を進め、学内構成員の意向投票を行って候補者何名かを総長選考会議に推薦する方式を提案し、現在意見を求めているところである。

加齢研の運営では、この4月から総務・人事、財務、研究推進、将来計画の4つの常置委員会の委員長が交代し、それに伴い執行機関としての運営会議も刷新されたが、ある程度システムが出来上がってきているし、法人化に伴った全学的な管理運営についての変化も収まりつつあるので、スムーズな運営となってきているのではないかと考えている。

前回も報告したように、加齢研は改組後10年間以上経過し、組織の見直しも必要となっており、新しい研究領域を創成してゆくことも重要な課題となっているので、将来計画委員会等の審議を経て「脳科学研究」「バイオインフォマティクス研究」を推進することを今後の課題として進めてゆくことにしている。また、東北大学のライフサイエンス研究の発展を考慮した星陵地区の組織再編の上から加齢研を軸とする新しい研究組織体制作りについても議論が行われたが、とくに結論を得る状況にはなっていない。一方、医工学研究科設置構想についても全学の検討委員会から第一次案が提案されたこと、また、加齢研からも多くが参加している21世紀COEプログラムについても、新たな研究教育機関の設置が考慮されていることなど、新しい動きが進みつつあるので、これまで同様、加齢研

独自の構想を深化させるとともに、関係部局などとも連携を取り、今後の変化に対応してゆかねばならない。加齢研は、組織としては小さいものの東北大学のライフサイエンス研究の要として活動しているので、今後も若い人を引きつける魅力的な研究環境を作り、発展してゆくことが全学的にも求められている。最近の財務戦略会議でやっと中期計画年度中の人件費および配置職員数がある程度確定したので、今後の具体的な人の動きも考慮に入れて着実な将来計画を立て、21世紀のライフサイエンス研究の中心となる研究所作りを急ぎ検討してゆくことになろう。

【分野紹介】

医用細胞資源センター

医用細胞資源センターの研究室は現在、教授、助手、技術職員、各1名と技術補助員5名という構成です。従来から行っている細胞バンク事業とともに生殖細胞の発生に関する研究を行っています。細胞バンクは、技術職員の藤村維子を中心に、技術補助員の小泉藤美、池田真樹子、佐伯久明が、ヒト腫瘍細胞株を中心とした保存細胞の分与と新たな細胞株の収集、保存を行っています。小泉は保存細胞株の管理、分与依頼の処理、発送業務等を主に担当し、佐伯は保存細胞の維持を行っています。また、保存細胞株のコンタミネーションやマイコプラズマ感染の検査等の品質管理にも力を入れており、池田は細胞の維持とともに品質管理にも従事しています。学内、国外を含めて全国から、毎日多数の細胞分与のリクエストがあり、研究リソースとしての細胞バンクの重要性がクローズアップされる一方で、現在、当センターの細胞バンク事業はナショナルバイオリソースプロジェクトの一環として、理化学研究所バイオリソースセンターの細胞バンクと連携をとりつつ進めてお

り、近い将来、理化学研究所との事業の一部統合なども含めて、今後の方向性を考えるべき時期に来つつあります。

一方、生殖細胞発生に関する研究は、教授の松居靖久を中心に、助手の岡村大治、技術職員の藤村、技術補助員の時武裕子、谷口大史が従事しています。岡村はマウスの胚発生初期段階で、始原生殖細胞の発生運命が決定されるメカニズムの解明を目指しています。哺乳動物の初期胚は多能性幹細胞集団としてまず発生し、そのごく一部が前駆細胞を経て始原生殖細胞に分化し、残りの大部分は体細胞組織に分化します。岡村はこれまでに前駆細胞から始原生殖細胞への分化が再現できる初代培養系を利用して、前駆細胞同士の細胞間相互作用が分化決定に必要で、この相互作用には細胞接着分子 E カドヘリンが必須な役割を果たしていることを見だしています。また最近では、多能性幹細胞と生殖細胞で特異的に発現する転写因子 Oct3/4 遺伝子を改変した ES 細胞でキメラ胚を作ることにより、Oct3/4 タンパク質の発現変動が、前駆細胞から始原生殖細胞の分化決定にいたる過程で重要な役割を果たしていることを明らかにしています。これらの実験でキメラ胚の作製には時武が、また遺伝子解析には谷口が大きな貢献をしています。

藤村は、先に述べた細胞バンクに関わる仕事とともに、始原生殖細胞の分化段階や細胞集団の不均一性を明らかにするために、これまでに同定した特異的な表面抗原に対するモノクローナル抗体を作製し、これらによって染色、分画した始原生殖細胞の性質を調べることを目指した研究を開始しています。時武は、キメラ胚作製、受精卵凍結保存、実験動物の維持・管理等の発生工学に関する実験全般を担当し、さら松居とともにフローサイトメトリーやタイムラプス顕微鏡などを駆使して、始原生殖細胞が多能性幹細胞に変化するメカニズムの解明に向けた

研究を行っています。谷口は岡村とともに、始原生殖細胞の分化決定にかかわる新たな遺伝子のスクリーニングと同定を精力的に進めています。

このように当研究室は小規模ながら、それぞれの構成員が役割分担をしながらプロ意識を持って業務・研究に従事していると自負できるのではないかと思います。現在、大学院生は所属していませんが、今後、自ら道を切り拓いて行くことができる研究者の育成と研究の展開を目指して、研究教育を行って行きたいと考えています。

文責：松居靖久

【留学報告】

「パリの空の下で、c'est la vie と叫ぶ」

松永英治

(現所属：理化学研究所脳科学総合研究センター 生物言語研究チーム)

真面目に研究の話を書いたところ、あまり一般ウケしないと思うので、ここでは研究の話は最小限にとどめ、なるべく研究とは関係のない話をしたい。

修士、博士課程と、神経細胞の増殖・分化や、脳のパターン形成の研究を行い、神経発生学を一通り理解したいと考えていた当時の私にとって、神経回路形成を次の研究対象とするのは、ごくごく自然な流れであった。一般に留学先として非英語圏であるフランスを選ぶというのは、いささか変わり者といった感もあるのだろうが、恩師である仲村春和先生、助手の渡邊裕二先生といったフランス留学経験者のもとで育った私には、それほど違和感はなかった。ドイツでの国際学会を終え、生まれてはじめてパリを訪れた。次はこの街に来ることになる、そう確信した。観光名所に惹かれたか、パリジェンヌに目でも眩んだのかよくわからないが、今から

思えば、ひどく安直な理由で留学先を選んでしまったような気もしなくもない。あるいは、実は研究のことなどどうでもよくて、単純に人生の方向性を変えたかったのかもしれない。

私が留学先に選んだのは、当時サルペトリエール病院内にあった、小脳の発生学の研究で著名な Constantino Sotelo 博士のいた研究室であった。実際には、Sotelo 博士は退官前で、独立したての Alain Chédotal 博士と仕事することになった。Chédotal 博士は、若手ながら、神経回路形成の研究分野では、既にフランスを代表する研究者の一人であった。集中的に膨大な数の仕事をこなし、余暇は余暇で存分に楽しむ。研究は人生の一部でしかなく、研究も、スポーツも、家族と過ごす時間も、すべて同じぐらい重要で、しかも全てに真剣、そんな彼のバイタリティの凄さに、私はすごく驚かされることとなった。

「別に言葉が話せなくても、そのうち話せるようになるから、たいしたことないよ。」渡邊先生の言葉を真に受けて、「まあ、行けばなんとかなるや」と高をくくっていたが、実際にパリに住んでみると、街でもラボでも言葉は全く理解できず、お店に買い物に行っては、意味不明の言葉話を話す外国人として邪魔者扱いされ、一月もたたないうちに、とんでもないところに来てしまったことに気付いた。かといって、だまっついてはどうしようもない。めちゃくちゃなフランス語でどうにかコミュニケーションを計ろうと努力した。結果として、受験戦争の中で培った物事を知らないこと、間違えることに対する恥の意識はなくなったように思う。

パリで過ごすうちに感じたことは、ここは天国と地獄が共存した街であるということだった。街を歩けばすぐにわかるが、裕福な人々がいる一方で、至る所に物乞いをする人々がいる。道行くカップルもいれば、孤独に街をさまよう人々もいる。すべてにおいて、勝ち組と負け組

がはっきり分かれる。ある日、私はこう呟いた。La vie, c'est difficile. (人生とは、難しいものだ。)これを耳にした同僚はこう返した。La vie, c'est pas difficile, mais compliqué. (人生は、難しくはない。複雑なだけだ)。どうやら私は、もっと強く生きなければならないようだ。

配偶者ゲットに失敗して、すったもんだも経験し、憂鬱な日々を過ごすうちに、「いったい自分はここに何をしに来ているのか、この先、研究者として何がやりたいのか」と真剣に考え始めるようになった。

結局、自分の今後の研究の方向性を見つけるきっかけとなったのは、研究とは全く関係のないパリの美術館の絵の数々であった。単に美しいだけの絵なら、山のように存在する。膨大な数の絵の中で、名画として選ばれ半永久的に展示され続ける、その理由とは何なのだろうか、素直にそう思った。私は絵に関しては全くのドシロウトであるが、近代絵画を見ていると、やはり有名な画家達の絵は、明らかに一目見ただけでも誰が描いた絵かわかる特徴を持っている。単に一般ウケするだけではダメで、強烈な個性がともなっていないとてならない。地味でもいいから、他人とは違う観点からの研究がしたい、そう思うようになった。

かつて加齢研にいた頃の私は、研究が行き詰まると、なんとかしようと思ってがむしゃらに実験したものだが、彼らの思考パターンは、全くその逆だった。研究を続ければ、いろいろと壁にぶつかることも多い。だからこそ、おいしいものを食べ、オシャレな服に身を包み、映画を観て、パーティーでは踊り明かし、たまには長い休暇をとって頭を空っぽにする。そして研究する時は、無駄なく集中できる環境を整える。実際、様々なことで悩み、鬱な時間を過ごすよりは効率が良いし、そもそもその方が、生きていて幸せではないか、私もやがて、そう考え始めるようになった。

帰国直前に、共同研究者の Patrick Mehlen 博士のもとを訪れた。彼は若手ながら、依存性受容体の研究で世界的権威として知られる。彼もまた Alain と同じく、とても気さくで、ジョークをこよなく愛し、人を惹き付けてやまない人間的な魅力を持っていた。それ故か、ラボには自然と人が集まってくる。若くして出世していく理由の一つは、このあたりにあるのかもしれないな、と感じた。

そうこうするうちに、留学生活にも終わりが来た。コソ泥に遭い、スリに襲われ、空き巣にも襲われ、エレベーターには閉じ込められ・・・と、ハプニングだらけであったが、今から振り返れば、なかなかの貴重な体験だった。

3年に及んだ留学生活が、研究目的だったのか、遊び目的だったのか、なんだかよくわからないような内容になってしまったが、「(研究も含め)人生は全ての面において真剣に、そして楽しく生きなくては意味がない」、ということを学んだことが最大の収穫であった、ということで、勝手ながら、これで留学報告の終わりとさせて頂きたい。

【研究員会便り】

研究員会委員長 井川俊太郎

まず、今年度現在までの研究員会の活動、現況を報告しよう。

1) 研究員会主催または共催で以下のセミナーが開催された。

1. 平成17年4月20日、良陵会館記念ホールにて、Prof. Norbert F. Voelkel, University of Colorado による講演「Why it is so difficult to treat angioproliferative Pulmonary Hypertension?」(担当: 呼吸器再建, 星川康)

2. 平成17年6月27日、加齢研大会議室にて、Dr. David H Ingbar, University of Minnesota による講演「New Approaches to Stimulate

Pulmonary Edema Clearance」(担当: 呼吸器再建, 鈴木聡, 野田雅史)

3. 平成17年8月1日、加齢研セミナー室(2)にて、佐藤まりこ先生, University of Utah による講演「Neural crest cell makes cardiomyocytes in zebrafish<ゼブラフィッシュ心臓神経堤細胞のユニークな心筋分化のしくみ>」(担当: 分子発生, 東海林互)

4. 平成17年11月14日、加齢研大会議室にて、和田直之先生, Univ. California, Irvine による講演「神経堤細胞による神経頭蓋底部の初期発生」(担当: 分子発生, 東海林互)

2) 第124回東北大学加齢医学研究所集談会(平成17年6月25日、加齢研大会議室)の第7回発表コンテストで、免疫遺伝子の河府和義先生, 医用細胞資源センターの岡村大治先生がめでたく、受賞された。拍手喝采。

3) スポーツ大会に関するアンケートの結果、フットサル24票、ボーリング23票で、本来ならばフットサルを開催するべきところ、討論の結果、会場探し、人数集めの困難さから、10月11日にボーリング大会が執り行なわれた。今年は、例年のほぼ倍の52人の参加者に恵まれ、研究者間の交流を目指す、研究員会としては、喜ばしい限りです。事務局の斉藤さん、スポーツ委員の海部先生(遺伝子導入)、福田先生(神経機能情報)その関係者に、この場を借りて感謝いたします。

4) 研究員会とオリンパスとの共催で第4回顕微鏡セミナーが10月27日、28日の両日に加齢研セミナー室で開催され、プロメガ株式会社、テクニカルサービス部部长、本間直幸先生が「タンパク質蛍光標識を利用した新しい Bio imaging 技術の開発とその応用」の講演をされた。

5) 11月15日の研究員会委員長・副委員長選挙の結果、有効投票数88票中、私井川俊太郎(分子発生)47票、渡邊利雄先生(免疫遺伝子)7票、中村晃先生(遺伝子導入)6票ということで、最

多得票者の得票数が過半数に達し、選挙規定第10条により私がめでたく？再任された。すでに委員長経験者である渡邊先生は、同10条の「受諾しない権利」により、副委員長を辞退され、中村晃先生が副委員長に選出された。任期は平成18年1月～平成19年12月です。

この選挙結果に関して、選挙管理委員会から前例のない程白票が多かったとの報告を受け、私は相当な危惧を抱いている。正直に吐露すると、自分に科せられる雑用から回避したいがために、対抗馬となりうる先生方に（例えば、私が渡辺利雄先生や安部まゆみ先生などに）、投票するよう身近の有権者に促した結果、白票が少なかったのだと思う。今回は、私でさえ、候補者の判断に窮する状態であった。これは、個人的な独創性を必要とする研究において、良きにつけ悪しきにつけ目立つことは重要な因子であるにも関わらず、投票対象者となるような目立つ会員が希有になっていることの証左である。どこかの政治家が、「偉大なるイエスマン」といけしゃあしゃあとのたまわったが、このような性格が、全国に蔓延しているのであろうか？是非とも元気を出して、自己の表現を厭わない若い研究者の出現が待たれる。また、投票する側も自分の所属する教室のみに注意を払い、周りの研究者達に目を向けていないことの現れではないだろうか？若い研究者が育つためには、ロールモデルが必要であり、ごく一部分でも、自分のスタイルに取り入れる対象となるような研究者を見る目を養い、自分の成長に役立てるよう努力すべきである。しかし、この事態の解消は相当な難題である。

話はそれだが、前述の如く、若い研究者の育成が可能なるよう幅広く交流を図ることを主たる目的とした研究員会は本年度も活発に活動を繰り広げてきた。それに水を差すようだが、研究員会では、従来通りの予算を組むと、将来的に大きな収入欠損が生じることが、明らかになっ

てきている。そこで、定例委員会では、予算削減の柱として、スポーツ大会の商品をなくす、コンテストの賞金をなくす、新年会、新入生歓迎会と二度の親睦会を新入生歓迎会に集約し、ポットラックのように食料の持ち寄る等の改革案を論議してきました。特に新入生歓迎会に関しては、4月の早い時期に、各分野ごとのポスター発表と食料の提供を並行して行ない、早い時期から学問上の交流を深めようとする意見が出されています。これは、私が前回記述したように、同じ親睦でも、学問とカップルしたものを理想とする私の考えに合致しており、強力に推進したいと考えている。

以上のように、改革、難題を抱えている最中に、私事で恐縮ですが、この12月1日より、学際科学国際高等教育センター（以下学際センター）を本務として、加齢研は兼務ということになり、この面倒くさい改革を途中で脱出できるのかな？とも考えておりました。しかし、研究委員会規定には私の辞退への道は存在せず、引き続き委員長の任に当たることになりました。実際教授会においても、加齢研における権限は全て認めるので、義務も今まで通り果たすようお達しを受けました。研究者間の交流を信条とする私のグループは、まさに加齢研周辺の方々の協力あってこそであること、通勤通学がとても不便になること、助教授のままなので余り変わらないことなどを考慮して、このまま加齢研で、研究を推進し、学際センターは名目上に毛の生えた程度でもよいとのことで、兼務をお受けしました。しかし、移動したいという希望を持つ学生が実際にいること、完全な独立であり、自由度、可能性が少しでも広がること、また新たな交流につながることを、ささやかなれどもラボを持てる楽しみを考慮して、まず、全面的に移ってから考えることにしました。何事も、前向き、ポジティブにとらえる性格なので、まずやってみようということです。皆様におか

れましては、加齢研の派出所が増えるくらいのとらえ方で、よりいっそうの交流の機会が増えるよう、大いに利用していただきたいと思っております。このような次第なので、研究会の改革には、是非とも会員その他加齢研の皆さまの御協力が必要不可欠ですので、多大なる御協力を仰ぎたいと考えております。

【研究会同窓会広報】

庶務幹事 近藤 丘

庶務報告

- 研究会同窓会会員の確認（平成17年11月現在）
通常会員 788名
（名誉会員 76名，所外 515名，所内 197名）
賛助会員 30施設
購読会員 17件
物故会員
（平成17年6月～平成17年11月）
佐伯 守人先生
平成17年 3月 29日
斎藤 裕先生
平成17年 5月 3日
早川 勝先生
平成17年 10月 14日
- 加齢研ニュース 43号発行
平成17年6月
- 第124回集談会
日 時：平成17年6月25日（土）
午後1時から
場 所：加齢医学研究所大会議室
一般口演 8題
- 平成17年度加齢医学研究所研究会同窓会総会，講演会および懇親会
日 時：平成17年6月25日（土）
集談会終了後
場 所：総 会 加齢医学研究所大会議室

午後4時から

講演会 加齢医学研究所大会議室

午後5時から

講師 永田 和宏 氏

懇親会 プロジェクト総合研究棟

（旧加齢研病院）セミナー室

午後6時15分から

今後の予定

- 第125回集談会
日 時：平成18年1月27日（金）
午後1時から
場 所：加齢医学研究所大会議室
一般口演
- 第36回加齢研シンポジウム
日 時：未定
- 第126回集談会
日 時：平成18年6月24日（土）
午後1時から
場 所：加齢医学研究所大会議室
- 平成18年度加齢医学研究所研究会同窓会総会，講演会および懇親会
日 時：平成18年6月24日（土）
集談会終了後
場 所：総会 加齢医学研究所大会議室
- 加齢研ニュース発行
44号 平成17年12月
45号 平成18年 6月

[編集後記]

本号から編集を担当することになりました。よろしくお願いたします。おかげさまで、これまで通り発行することができました。今後とも加齢研ニュースへのご協力をよろしくお願いいたします。

なお、加齢研ニュースのオンライン版も公開中です。URLは以下の通りです。

<http://www.idac.tohoku.ac.jp/alumni/index.html>

工藤忠明